

幼小連携について考えておくべきこと

無藤隆¹

Considerations about the linkage between kindergarten and elementary school curriculum

Takashi Muto¹

幼小連携の現状

私, いろいろな研究テーマのなかで幼小連携というテーマを今大きな柱として考えております. その幼小連携についてはおそらく3, 4年前からかなり, 実践的に拡がり始めたと思うのです. 幼小連携ということ自体は, 当たり前ながら昔からももちろんあるわけですし, 幼稚園と小学校が交流するということはある程度, 特に10年ちょっと前に小学校に生活科がはいったあたりから, 生活科の授業のなかで幼稚園訪問するとか, あるいは逆に, 幼稚園, 保育園も含めて, 入学前に小学校を訪問して体験するということが十数年かなり普通になってきたと思うのですけれど, さらに踏み込んで幼小連携あるいは保育園まで入れれば幼保小連携ということになってきました. これはやはり意味があると思うのですけれど, 結局, 幼児教育にしても小学校教育にしても, いろんな意味でのレベルアップを図るなり, 抱えている問題みたいなものを補正するなり, いろんな方策があるのだと思うのです. その方策のひとつとして, 今, さまざまな段階での連携ということがあると思います. ですから, 例えば, 小学校と中学校との間は中小連携だし, 中学校と高校の間は中高連携, むしろ中高一貫が増えたのですけれど, 高校と大学の間でも高大連携だったり. また, 大学と企業では今例えば産学連携とかインターンシップとかいう形で拡がっていると思うのです. そういなかで幼保小連携というのも拡がりつつあるということだろうと思います.

特に幼児教育の側から見たときには, 今, 幼児教育中身そのものの課題とともに, 連携という意味合

いで言えば, ひとつは保育園と幼稚園との関係です. これは今日あまり立ち入りませんが, 幼稚園と保育所の一元化まではいかなくとも, 合同というあたりは今急激に進みつつありますけれども, そこまで入らずに別々であろうとも, 同じ地域の幼児教育施設としてどうするかということがあります. 保育園と幼稚園との連携というのはあると思うのです. 同じ地域の人間として, 幼児教育の人間としてどうするかということです.

もうひとつ, 幼児教育にとって, 家庭との連携ということが問題になるわけです. これも今日お話しできませんけれども, 子育て支援とか, あるいは保護者との連携とか保護者による保育参加とか, あるいは就園前のお子さんなり親御さんとかかわりであるとかいろんな形で今広がりつつあります. それと並んで幼小連携というのがあるわけです. これは幼稚園側, 保育園側としては, 自分たちの幼児教育における成果をどう小学校教育につなげていくかということになります. 小学校側から見たときには, 逆に幼児教育における成果を小学校教育にどう取り入れていくかということや, 小学校教育として幼児教育にもっと要求することがあるのではないかと, そういったことがあるわけであります. 例えば, 幼小連携に特別熱心でもない小学校の先生や校長先生や教育委員会の重鎮とかそういうひとに幼小連携についてどう思いますかと聞くと, たいいていのひとは, 非常にいいことだと, 小学校は子どもたちが立ち歩いて困るとか, 幼小連携, 幼児教育にはもうすこししっかりしてもらわなくては困るとか答えるわけがあります. そういう声が多いのです. そこにいろんな批判もあり誤解もあると思いますけれども, その誤解も含めて幼小連携の課題であると思います.

では, その幼児教育側から見ればどういうモチ

¹ お茶の水女子大学

ベーションがあるのかということですが、ある意味では卒園しているわけだから関係ないといえれば関係ないのですけれども、実際に卒園した子どもたちが小学校行ってどうなのかということを見る機会が出てくると、いろいろな意味で幼小連携が必要であると考えようになるのだと思います。

幼小連携の必要性

例えば、自分の園の子どもたちが小学校の1年生の1学期にどういう授業を受けているかといったことですか、そればかりではなくて、例えば、小学校5年生になったらどうか、6年生になったらどうかという様子を見る機会を作っていくと幼児教育側の意識もずいぶんかわっていくような気がします。幼稚園の先生が自分の受け持った子が1年生でどうであり5年生6年生でどうであるかといったことを実際に見たり聞いたりする機会を増やしていくということは非常に大事なことですし、ときにすごいショックを受けることもあると思うのです。例えば、6年生になって不登校になった子どもがいて、その子は幼稚園でどうであったか、自分の受け持った子どもがそうなったとき、いろいろ考えてみると、すでに幼稚園のときに問題があったかも知れないわけで、そこになんら手立てを施せなかった。いやそうではなくて、幼稚園のときにはあんなにいい子だったのに小学校のどこかでつまづいてしまったのかも知れないしということができてきます。そういった話し合いのことを考えても、そこに幼小連携ということの意味が出てくるように思います。

そのへんが実際のなところだと思うのですけれども、また別の角度から、幼小連携ということのカリキュラム上の、意味を考えてみますと、難しくなりますが、簡単に言いますと、小学校教育も幼児教育、幼稚園教育も私の意見ではかなり重大な変わり目に来たと思います。小学校教育については、まだ小学校教育に関わる先生方は気づいてないかも知れませんが、小学校という6年間の教育というのはそろそろあとちょっとで崩壊するところに来たというのが私の判断です。もうその兆候ははっきりと施策によってでているわけです。何がでたかといいますと、小学校高学年においては教科担任制を相当取り入れようということが打ち出されたわけです。これがもっと強化される。ということはやはりかなり中学校教育に近づくということです。小中連携とはまだうたってはいませんが、実際に交流しているケースはまだ少ないのですけれども、5年生6年生ぐらいの教育っていうのはかなりこれから大きく

変わってくると思います。

学制改革というのはあまり簡単なことではないので、これからの5年10年で、そちらに行くとは思いませんけれども、実質的には相当動くと思います。それではそれに対して小学校の低学年ではどうなのかということですが、それは現在の公立小学校で見て行きますと、無風状態という感じがします。どちらかというと小学校6年間の教育のなかではなんとなく忘れられているのかと思うのですけれども、つまり昔生活科がはいったというあたりでは大騒ぎしている。現在では小学校教育というのは、現在っていうのは本年度あたりでいえば、やはり総合的な学習、また特に高学年では、習熟度の学習なりいろいろな課題が入ってきましたので高学年では大変ですけど、低学年は今のところまあいいかということだと思いますけれども、これからそうも言っていられなくなってくるだろうと思います。

それは要するに特別な言い方をしますと、6年間という時期は長すぎるということではないかと私は思います。ひとつのシステムで6年間を通すという教育のやり方はちょっともう維持できないだろうとこう思います。なんらかの意味での区切り方が必要だろうと思います。

じゃあ、幼児教育はどうかっていうことですが、これについてはまだ合意がなくて、これからみんなで考えていく必要があると思うのですけれども、私はあまり根拠はないのだけれども、ラフな言い方をすると、幼児の半年間が小学生の1年間と思っておまして、だから、幼稚園は3歳児から3年間で、小学生でいうとちょうど6年間ある。小学校の6年間が長すぎる、ひとつのシステムで長いならば、幼稚園の3年間もひとつのシステムでは長すぎるのではないかと。こちらにはご専門の先生もいらっしゃると思いますが、比較教育的に言っても、幼児期の3年間を同じ教育システムでやっている国はそう多くないと思うんです。その区切り方は国によっていろいろとちがいますが、ですから、ちょっとここを考え直す必要性がある。つまり、昔々のような基本的には4歳5歳を中心として1年保育2年保育の時代、平均的に言いますと2歳児の真ん中あたりから幼稚園が始まるとすれば三年半ぐらいですけれども、それだけを、例えば一人の担任の先生がいて、幼稚園は目いっぱい定員をとれば35人いるわけですが、それを保育するというやりかたはかなり限界にきている。それでそういう意味で幼稚園教育も、小学校教育もいろんな意味での改革が必要なのだと思いますけれども、そういう

なかで幼小連携っていうのがひとつの切り口であろうと思うわけです。

移行に関する問題

では、切り口としては何をやればいいのかということですが、大きく言いますと、小学校へのその就学年齢というものを考えるか否かという問題だと思えます。で、これは昨年の、中央教育審議会の中間まとめっていうのが秋に出たと思うのですけれども、そのなかに小学校の就学年齢の弾力化っていうテーマがこういうふうのようになっております。したがって弾力化というのは、遅らせていいのです。しかし、今の世の中でいうと大分早めるということですから、日本のような国だとどっかがはじめたら一気にそっちに行ってしまうでしょうから、本当にそうなったら幼稚園教育関係は崖っぷちとなるでしょう。そこまで行かなくても、今の幼稚園と小学校という区切り目をそのままにしたとしてもどうも今の幼稚園と小学校あるいは保育園も含めて、その段差が大きすぎやしないかということをしていろんなひとが指摘しています。これは子どもにとっての段差もちろん大きいけれども、その教育のシステム、教育課程とか教育の方法等々いろんなところで一気に変えすぎではないかということです。変えることによって、子どもに対して混乱を与えているかどうかはちょっとはつきりしませんけれども、もしその小学校1年生で学級崩壊とまでは言わなくても学級で立ち歩いているとかなんかが増えてきているということが事実だとすれば、印象的にいうと事実だと思えますが、実証的証拠はないと思うのですけれども、それはやっぱり段差の大きさの所以だと思えます。

そうだとすると、そこをなんとか改めないといかないということです。それは、その段差があるから、階段のようにがたんと変わるところ、それをまったくスムーズに平らにしたほうがいいか悪いかこれはまた別の話です。で、階段を坂にするみたいな、ゆるやかな坂にするほうがいいか、そうじゃなくて適度な段差があったほうがいいか、それは実際にやってみなければわからない話です。まったく段差をなくそうという、そもそも相当無理がある主張ですから、そう頑張らなくてもいいと思うんです。例えば、小学校は教科があって教科書使って先生ひとりひとりいて、それを一気に小学校をやめるというわけにもいきませんし、じゃあ、幼稚園に入れると言われても幼児教育としては困るわけですが、いろんな意味での段差ってあるんだと思うんだけど、それを

もうちょっとなめらかなほうに少しは近づけられないかということなんです。さきほど、幼児期、幼児教育3年間、小学校教育6年間がちょっと長すぎるんじゃないかという感じで言えば、幼児教育についてもどういう区切りがいいんだということはともかくとして、いくつかに区切り、小学校もいくつかに区切って行けば、階段は階段だけど今のような断崖絶壁を越えるというようなことじゃなくて、小中連携については今ちょうどこの1年ぐらい前から、急激に模索して今年度広がって行くと思うのですけれども、つまり、先ほど言ったように、小学校において、その教科担任を増やしていくということだけではなくて、例えば中学校1年生においては逆に学級担任の活躍する場を増やしていくのです。それから、小中連携をやっているいくつかの試みのなかには例えば小学校の6年の担任から中学校1年の担任をつなげてしまおうというアイデアもあります。小学校の先生が中学校に行くのです。そういうアイデアを交換するとか、いろいろな案があるわけですが、もちろんそのなかには英語を中学校1年生の英語を小学校からやってしまうというのものもあるし、今いろんなアイデアが出ていますけれども、それは中学校の場合にはその中学校1年生の1学期から2学期にかけて学力的な問題がひとつ出ますし、あと不登校が増えますし、非行も一気に増えますから、中学校のシステムにおける不適應ということだけではないと思いますけれども、いろいろ問題があると思うのです。

先ほどいったように小学校でどれくらい問題点があるかよくわからないけれども、同じように考えていくことができると思うのです。ひとつ、私が提案したいのは、また、いくつかの研究開発校を中心とした実践で見られるのは今のように幼児教育と小学校教育の区切り目をもっと増やしていくということです。で、もうひとつは幼児教育の場合には5歳児の特に後半、5歳児の秋から3月までの後半というあたりというのはかなり考え直したほうがいいのではないのでしょうか。逆に、小学校1年生の教育もかなり考え直したほうがいいのではないかと思うわけです。幼児教育の側では、特に3年保育の場合ですけれども、というのは、こんなこと言うと幼稚園の先生にはときどき怒られてしまうと思うのですけれども、幼稚園によっていろいろ違っていて一概には言えないのですけれども、私がよく行くような東京の都心の狭い幼稚園です。狭い狭い幼稚園もあるわけです。そういうところで3年保育すると3年は飽きるのではないかという感じがあって、いくら砂場が楽しいからといって3回ぐらいまでとい

う感じですが、広ければ別です。広ければ良いのですけれども、例えば、年長の男の子などは、サッカーがやりたくても、ボールをポンと蹴れば、ぶつかってしまっただけで危なくて、禁止しているところだってあるんです。サッカーはどうでもいいのかも知れないけれども、思い切り走る空間すらないってところがあるわけですね。広島は広いかも知れない。全国的にどのくらいかわかりませんが、一般的にはそうだと思います。で、保育園などはもっと狭いところが多い。苦勞されているところが多いと思います。園外保育という話もあります。で、そういう狭さというのは体力的にもそうですけれども、やはり知的な関心、その他のものでも、幼く感じられる部分があるのではないのでしょうか。別に文字を教えろとかなんとかということでは必ずしもなくて、知的なひろがり、社会的なひろがりがあるっていいのではないかというふうに感じるので。

それに対して小学校はどうかということですが、小学校1年生の特に1学期はあるいは秋ぐらまでの半年でもいいのですけれども、というのはどういう時期かと考えるかなのですけれども、これは我々等も研究したし、いろいろな研究がありますが、基本的にはその時期というのは、授業の参加の仕方を学んでいる時期だと思うのです。それは必要なことで、つまり、先生がこう何か言ったら、「はいはいはい」と手を挙げるとか、それで指名されるまでは答えを言わないとか、最初はすぐ言うのです。「分かってる」とか、でも、それを言っちゃいけない、待て、とか、それから、指名されたら立ちなさい。立つときにはちゃんと椅子をこう、ずらして、立って、で、喋って、座って、椅子を戻せとかです。小学校の先生がおられましたらご存知でしょうけれども、私の研究室でも私のよく知っている先生に頼んで、院生ですけれども、小学校の入学式の日から、教室に来まして、その日からビデオを回していた。小学校の先生は何にも思わないかも知れないけれども、あきれるほど指導が細かいのです。でも必要性は分かるのです。やはり、ちゃんと指導しておけばその後楽になります。そのとおりできますから。そうなのですが、ただ、普通に算数を教えるわけですが、国語も教えるわけですが、例えば、1年生の算数なんて見ていると、あれは算数を教えているわけじゃないというのが私の見方です。算数を教えていないと思います。何を教えているかということ、算数の記号の使い方を教えているのです。それは大事なことです。足すっていうのは、こういう十字を書くのだと。どうしているかということ、例えば、

5足す3とはこう言わないのだな、5個のリンゴと3個のリンゴを合わせたらいくつになる、よいうのをやっています。子どもたちはほとんどみんな答えを知っているのです。知っていますとも。だって、幼稚園の年長でテストすれば分かる。幼稚園の先生、やったらすぐに分かりますけれども、5個と3個、おはじきなんか使って、ほとんどの子は瞬間的に「8」と答えます。瞬間的にはではないにしても、ええっととか考えたり、指とか使ったりというのはともかく、一桁だったら多分瞬間的に8割以上の子が答えられます。ですから、小学校1年生1学期の算数っていうのは計算の答えを出させているというわけでは別れないのです。なぜなら、さっき言ったように、5足す3は？というとき、みんな言うのだから。「あ、答えを言うな。これから解き方を教えるから」と言うわけ。解き方なんて教えなくても答えを知っているわけですから、あれは非常に不思議なことをやっているわけですが、それは何をやっているかということ、それはもちろん計算の書き方を教えているわけですが、だから必要なものだけれど、厳密に言うと算数というか、数学的思考を教えているわけではないのです。それは文字を教えている。一種の、記号を教えている。それは将来研究が発達して脳かなんかを調べればきっと算数の脳ではなくて、国語の脳を刺激しているのではありません。

算数らしくなってくるのは繰り上がり、繰り上がりのときですけれども、あれも厳密に言うと計算を教えているわけではなく、計算の書き方を教えているわけ。例えば、「8足す7は15」。これも答えがわかるのです、子どもたち。15ってわかるのです。15っていうのは1と5をこう書くんだ。1と5はこうくっつけるんだ、離すんじゃないでちゃんとこう書け。まあ、そういうことを教えるのです。離して書けと、算数のノートは1年生のノートは升目がありますから、升目に数字1個で、最初は子どもたちは、15というひと升に入れるんです。それはやっではないけません。どうしてもだ、とにかくそう書くんだ。そうやって教えているわけ。で、私はそれを教えたほうが良いと思います、もちろん。将来本当の意味での計算に必要なことで基礎であるのですから、これは全然馬鹿にしているわけではないのですけれども、ただ、小学校の先生たちが理解していないと私が思うのは、それは考える力を養っているわけではないということです。考えなしなのです。なぜならただ理屈だけ覚えておけというわけですから、多少頭を使わせていると思いますけれども、数について考えているわけではない。では、数

について考えるとはどういうふうにやるのか。それは、例えば、リンゴ5個とリンゴ3個を合わせて8個にする。そういう場合はもちろん数を使っています。脳も。だから、そう考えてみると1年生の1学期というのは何をやっているかという、要するにその教室ルールを教えるということと、それから、文字とか数とかの、記号の書き方を教えているわけです。それは、無論大事なことで、そこをうまくクリアすると後の本当の意味での学習が楽になるっていうことですけれども、でも、あまり頭は使わないという感じがするわけです。

その前のときには、幼児期の時には頭を使っているのっていうことですけれども、それは使っているときも使っていないときもあると思うのですけれども。例えば、積み木を使ってそれをどう積もうと、ままごとで、どういう筋書きにしようかというときには、やはり考えるのです。考えざるをえない。そんなときには頭を使っているのです。もちろん、使っていないときもあります。誰かの要求どおり言うとおりにやってくればあんまり使わないですけれども。そう見ていくと、私は思考力の発達ということで考えてみると、1年生の特に前半ってのは思考力停止している時期だと。これは無理な注文でしょうけれども、そう思わないでもない。停止ってのは嘘で、やはり停止なんてしてないとは思いますが、あんまり頭は使わないということですね。授業というのはあんまり頭を使わないほうがいいのかも知れませんが、つまり、本当に頭を使っていたとしたら、いちいち、「何で？」とか本気で思ったりするでしょう。これは、教えられません。だって、どうしてイコールはこうなのって聞かれても困るのです。ですから、子どもはあんまり疑問を持たないでいてくれるからいいのですけれども、あんまり思考力は育たないと思うのです。だから、一種の型を教えているわけなのです。

そういうことを考えてみると、小学校教育においてすることはある程度必要だけれども、もう少し賢明なやり方があるのではないかなと思うわけです。そういうようなことで、もうすこし幼小連携を考え直したらいいのではないかという指摘がいくつかあるということですね。

では、具体的にどういうふうに進めていくかということについて考えて行きたいわけですが、ひとつは、小学校の先生はゼロからスタートだという発想をまず捨てるべきだというのが私の考えです。よく、小学校の先生、未だにっていうかわかりませんが、幼稚園では、遊んでいけばいいんです。余計なことを別に覚えなくて。数やったりとか、そ

んな必要はない。そんなことは小学校から全部教えるのだから、白紙で来て下さいっていう先生がいるわけですが、そういう先生は幼児教育に極めて理解があるように思うかも知れませんが、それは大間違い。そういう先生が最悪だと私は思う。どうしてかという、基本的にその先生が言っていることは幼児教育というのは遊んでいて、せめて45分間座っている、トイレにひとりで行けるようにしろ、後はいいんだ。幼児期ではどうせ頭なんて子どもは使っていないのだから、白紙で来ていいことですね。つまり、乳幼児期間の5年間に何の成果もない。自分たちはゼロから教えている、こう言っているわけです。

それは第1に幼児教育の成果を無視しています。第2に子どもは実際に発達しているという事実を単純に無視している。例えば、5歳の子が、おはじき使えば5足す3なんてできるわけです。だから、今時の子ですから、ひらがなの読み書きは8割9割の子はもうできるのです。教えていなくても。その成果に乗っかって、小学校での教育があるわけです。だから残念ながらゼロではない。

ゼロでないということはプラスもあるしマイナスもあるのです。余分なことを覚えている。例えば字を覚えるのはいいのだけれども、しっかりその書くことを教えているわけではない。幼稚園では教えませんから、例えば、筆順なんかでたらめだったり。だったら、白紙で来てくれって小学校の先生は思うわけなのでしょうけれども、けれど、それは白紙ではないのです。これは、幼稚園でも同じことなのです。家庭から子どもが白紙で来てくれたらこんな便利なことはないです。家庭で色がついてくる。それが発達というものでして、それに親だってそうです。白紙で生まれてくれたらこんな便利なことはないのですけれども、色がついて出てくるのです。胎内から。なぜなら、その前に遺伝があるわけですから。胎児にも環境があるし。生憎人間に白紙ってことはありえないから。必ず、その前があるのです。それを受けて教育するしかない。そこにはプラスもあるしマイナスもある。そういう当たり前の事実を認識したほうがいいと思います。マイナスもあるのですけれども、プラスもある。だから、小学校側としたらどうやって幼児教育側の成果を活かすかということをもっと考えたほうがいい。ただ、マイナスもあるわけで、いろいろな問題もありえるわけです。

ある小学校の校長先生が、私が今お話していることに近いことを言ったときに、小学校の先生ってのは専門家なのだから、1ヶ月もあれば子どもに

どんなことでも指導してやるってこうおっしゃったんです。まあ、そうなんだろうなあと思いますけど。しかし、私はその場でつまらんことを言ったのです。だったら、なんで学級崩壊が起きるのだ。どうして学力低下が起きるのです。まあ、内心の声として思いましたけれども、学級崩壊が起こることというのは、低学年で起こるという場合は、相当の原因は幼稚園で問題が起きているっていうことを知らないからなんです。例えば、幼稚園で指導要録を書きます。小学校の先生はほとんど見ないのです。あるいは、1年生の4月5月で問題かと思ったときに、幼稚園に電話してどうだったか聞けばいいと思うのですけれども、そういうことは聞かないのです。で、もたもたもたもたしているうちに半年経つわけです。半年してやっぱり同じだなあと思って、校長、教頭と相談して慌てて対処するというのが1年生の姿だってことです。そういうことに関しても言えるわけです。

今のように考えてみると、やはり、幼稚園のほうももちろん小学校に送り出すわけですから、幼稚園の成果、幼児教育の成果っていうのは何かということですか、それを小学校にどう伝えられるかということをはっきりさせておかなければならない。それは、幼児教育の3年間でもっと細かく、3歳児の成果は何であって、それを4歳にどう伝えるか、4歳はそれを5歳にどう伝えるか、もっと細かく言えばそういうことも問題となると思います。

相互交流

そのために、具体的には、幼小連携の研究・実践を始めたとします。どういうことが問題となり、どういうことを考えていくかということなのですけれども、ひとつは、幼稚園側も小学校側も本気でやらなくてはならないという、あたりまえのことを言いたいと思うのですが、組織が違うと面倒くさいわけです。打ち合わせもしなくてはけないし。さらに、交流するだけではなくて、今申し上げているように、カリキュラムまで変更しようと思うと大変なのです。現状を変えないといけないわけですから。そうすると、それぞれの組織のなかでは現状に対して、それほど問題だと思っていることは少ないわけです。そこを変えないといけないということは大変です。そうすると、例えば、校長が何の因果か知らないけれど指定校になってしまったからやると、そういうことが多いわけで、現場の先生にしてみれば何だかよく分からないけれども上がやれっていうからやろうかとなる。じゃあ、しょうがないんで、委員会開くんで幼稚園の先生と小学校の先生来てくだ

さい。そうして話し合いなどする。何しましようかね、ということになるわけですけれども、で、これはほとんどの実践校のスタートの一面だと思います。研究開発学校に私いろいろと関わりましたけれども、どこもだいたい同じようなものです。ですから、そこは上から降ってきたか、どこから飛んで来たかはともかくとして、かなり本気でやらなくてはならない。本気でということは片手間ではできないし、相当な時間を使わざるをえない。また、打ち合わせの時間というのを見つけなければいけません。その空いた時間にやろうと思っていることは絶対にできないわけで、それぞれが実践しているわけで忙しいんですから、その空いた時間なんてそもそも存在しているわけないのです。だから、無理やりにも打ち合わせの日を割り込ませる。そのうち空いている時間にやろうと思ったら、空いている時間は永久に来ませんから、やはり位置づけるしかない。定期的にやるとか、それがひとつです。

2番目は、それでは、その上で実際に何かやらなければなりません。話し合いを始めます。それでほぼ確実に起こるのが、幼稚園と小学校の対立なのです。ほとんど9割以上の確率で、100パーセントと言ってもいいですけれども、その幼稚園と小学校の間でいざこざが起こる。けんかが起こる。けんかといっても大人だから実際のけんかではないけれども、けんかに近いことが起こってくる。話し合いの席で、これくらいの人数的話し合いの席で言い合うこともあるし、その席では本当になごやかにやって、幼稚園と小学校にそれぞれに戻って職員室で愚痴を言い合うというのものもあるし、いろいろなパターンがあるのでしょうけれども、それぞれ文句を言うわけです。そういう時期を経過しなくてはいけないのではないかと思うのです。相当にお互いに言いたいことを言い合える関係にしていなくてはいけない。ああそれはいいですね、それはいいですねって言うだけではできない。それはお互いを変えることですから、自らを変えることですから。しかも困ったことに自分はちっとも悪いと思っていないことを変えなくてはいけないこともあるわけで、それは面倒くさいし大変です。それは相手が何か知らないけれども批判されて変えていくわけです。

そもそも変えるどころか、相手の言っていることがよく分からない。小学校側では指導要領とか何とか体系的にできていますから、言葉がありますから。そう言われても幼稚園としては何か違う気がするのだってあるわけです。で、幼稚園の先生たちが言っていることについて言うと、小学校側からしてみるとよく分からない。じゃあ、お互いに授業を

してみてもお互いに見てみようということになるわけです。ところが、そこでもよく分からない。例えば、小学校の先生がよく言うのは、幼稚園の保育というものに、要するに目標はどこにあるんですかとか、目標は書いてあるけれどこの目標に対応した活動はどこになるのか。昨日の保育と今日の保育はどこが違うのか。この間も昨日も砂場に行っていた。目標が違うようだけど、どこが違うのかとか。先生はあそこにずっといたけれど、何を指導していたのか。こっちでも子どもが遊んでいる。何かやれとかです。もうちょっと丁寧な言葉ですけど。幼稚園の先生が言うのはだいたいパターンが決まっています、算数教えたり国語教えたりしていて、さっき私が言ったことに近いのだけれど、なんだか手の挙げ方ばかりやって、もうちょっとちゃんとした感じでやったらどうですかとか。子どもが楽しくいろんなことをしようとしているのに、どうしてそこで止めるのですか。算数無理にやらないといけないんですか。砂場やりたきゃいかせりゃいいじゃないですか。そういうようなことを言います。

相互理解

それぞれ発想としてはもっともですけれども、そういうなかでお互いが何をやろうとしているのかっていうのが、段々こう伝えていかなくてはならない。で、もし伝わらないのであれば、それはそれぞれが身内のいわば言語なのです。それを身内でない人たちにどうやって伝えるかっていうことを、考えていかなければならないです。

そうやってきますと、どこかでその話し合いと参観のレベルを超えていく必要があるわけです。で、どうやったら超えていけるかということですけども、ひとつは、参観のやり方を丸1日中見るという方式に変えたほうが良いというのが常々私の意見なんのですが、そう言ってもなかなかやってくれませんけれども。特に小学校の先生が、単位の授業が、当然ですけども、1時間の授業なのです。そうすると1時間の授業というのは、時間は限られていますから、今日は算数何ページからと言うのです。起立、礼、やってもやらなくてもどうってことないので、そこからなんとなくスタートして、それで45分やって終わる。それを単位にしています。それで保育を見ようと思うと、もちろんそういうふうに乗る保育もありますけど。今日はこれを作るからということどうまく終わるときもあるんです。しかし、保育というのは基本的には子どもが園に行ってから帰るまでを単位にしている。みんなが認めるところですけども。だから、全部見たくなる。

つまり、公園に行ったときに先生が子どもに対してどう対応するかを含めて保育であるし、また、例えば、小学校の先生が幼稚園に対して子どもをずっと遊ばせていると言うわけだけれど、ずっと見ていると、幼稚園も保育園もその保育の中で自由に遊んでいる時間はあるのですけれども、例えば、お弁当や給食の前には必ず集まっているんな話をしたりとか、帰るときに先生が絵本を読んだりする、集まって話をする時間もあるのです。だから、子どもが自由に積み木や砂場をしている時間ももちろん大事だけれど、中心ですけど、そればかりではない。いろんな時間、いろんな活動があります。そういうことをきちんと見ていく必要があるということです。

そういう意味では小学校の授業についても、完成された授業案、授業を1時間見るだけではなくて、その準備はどうやっているんですか、この課題をどういう形で作ってきたかということをお互いに見ていく必要がある。そうすると、保育や授業を見るだけでなくてひとつは流れを見たほうが良い。そして、もうひとつはそれぞれの、解説を十分にみんなが理解しなくてはいけない。結局、解説なしに見ても、お互いのそれぞれがもっている思い込みを強化しているだけです。例えば、保育を見に行ったら先生がずっと何だか知らないけれども子どもたちをずっと見ていたとか、あるいはある子どもたちとずっと遊んでいたとか。小学校の先生が、最後にお礼を言って、私も幼稚園の先生になりたいですよ、子どもと遊んでいて楽しくって。そこが間違っているのです。おそらく楽しいでしょうけれども。子どもと遊んでいて楽しいっていうのはちょっとちがうだろうと思うのです。その子どもとある先生が遊んでたとしても、そこに前日までの流れの中で、この子を相手にしようという何かがあるわけです。こっちで遊んでいるときに、こっちで遊んでないわけですから、あの子はとりあえず今日はいいとして今日はこっちとか。そして、2時間3時間あるとして、そこに3時間ずっと居ばなしということは多分なくて。そういうことを見なければならぬし、解説してもらわなければたぶん分からないです。それで、実は小学校だってそうです。小学校の授業だって1年生って割合「はいはい」と手を挙げます。先生は、黒板見ながらこう指すわけだけれど、無意味には指してはいないわけですから、なんらかの理由をもって特定の子を指すわけです。で、こう見て、あ、あの子は手を挙げてないなあ、とか見えます。では次の質問のときにあの子になんとか何か言わせようとか、大体こう考えているもんだと思います。そういうのは解説してもらわないと分からない

いことです。そういう細やかな配慮というのがお互いに見えてくるのではないのでしょうか。そういうふうな努力がまずひとつ必要だと思います。

それからもうひとつ必要なのが保育や授業を一緒にやってみるといことだと思のです。これは交流です。生活科のほうに幼稚園の子を呼んだりとか、あるいは、小学生が幼稚園を訪問したり。いろんな形で交流できるわけですが、その交流するとき一方的に幼稚園の先生が何か考えているとか、逆に、小学校の先生が何か考えているということではなくて、一緒に保育案や授業案を作る、そして実践する、反省するということです。だから、例えば小学校のほうで生活科でなにかやると、幼稚園の先生に子どもたちを連れて来てくださいと言うと、子どもたちを連れて来て、それで子どもたちを小学校の先生に渡して、幼稚園の先生はそばでずっと見ているんです。で、終わると、ありがとうございましたと言って帰して。そういうやり方では駄目なのです。そうではなくて、一緒にその保育案や授業案を立ててみる。1時間の保育や授業の交流があるとして、その前後それぞれがどういうことをそれぞれやるか、幼稚園や小学校では何をやるかということまで、流れを作ってやっていくのです。

もうひとつの交流というか、一緒に保育や授業を立てて行くやりかたは、小学校の先生が保育をする、逆に幼稚園の先生が授業をするという授業体験を、小学校免許なり幼稚園免許をもっていないとすれば、1時間をフルにやってしまうことはできないと思いますけれども、部分的にはいいと思うので、例えば、幼稚園の先生といっても、勉強の仕方でのいろいろあって算数を教えてといわれても困るかも知れない。国語のある単元とか、生活科のある部分とか、あるいは、チームティーチングで一緒にやるとか。それから、保育も。小学校の先生がひとつのクラス30人を面倒見ろというのも大変ですから、例えば、あるコーナーとか、そこに、例えば、図工の先生だったら、何かものを作るような課題をそこにいれて何人かにやってみるとか。例えばそんなふうなものが考えられますけれども、あるいは体育の先生がやってきて一緒に何にかするとか、何でもいいのですけれども、あるいは理科の先生が来て庭と一緒に植物が何かつかって遊んでみるとかいろんなやりかたがあると思うのですが、それを1日やってみる。で、あるいは数日間続けてやってみるとか。お互いの苦労やポイントっていうのが全部見えてくるわけです。

そういう形で、授業や保育を一緒に組むというなかで段々見えてくるものもある。しかし、実際には、

多くの附属のように一緒の敷地にあるとか隣り合わせにある場合はそういうふうに行き来できるわけです。けれども離れている場合もあります。あるいはひとつの小学校に対していくつもの幼稚園・保育園から来て、交流と言ってもなかなか特定のところを選びにくいということもあります。場合によっては10校ぐらいのところから、来るような小学校もありますし。それから、附属からさうとう物理的に離れているところもあるわけで、広島の場合も幼小連携の場合はちょっと困ると思うんですけども。そういうふう交流がしにくい場合もあるのです。そういう場合にどういふふう考えればいいのか。そこにカリキュラムレベルのつながりっていうのが先ほどいろいろ言いましたけれども、幼稚園3年間、小学校6年、それがちょっと大きすぎれば、せめて幼稚園の年長と小学校1年生の2年間を考えてみればどうか。

カリキュラム開発

では、具体的にはどうやったらいいかということですが、けれども、いくつかのやりかたがあって、これは大体、研究開発学校でやっている、いろんなやりかたがありますけれども、お茶の水大学の附属もそうですし、神戸とか、お隣の岡山の附属とか、鳴門の附属とか大体こうパターン・やりかたが似ていると思うのですが。何かっていうと、ひとつは、幼稚園の教育課程を上を伸ばしていくという発想です。幼稚園の教育課程もいろいろですけど、多くの幼稚園が、特に附属などもそうですけれども、幼稚園の3年間をいくつかの時期にわけていくということがおうおうにあります。学年で分ければ3つだし、半年で分ければ6個だし、もっと細かく9個に分けたり、まあ分け方はいろいろですけども、このように分けて、大雑把に子どもの発達の流れを作っているところが多いと思うのですけれども、それを、そのまま上にもっていったらどうなるかということですが、小学校6年生まで見るのはちょっと辛い。せめて、2年生。例えば、友達と仲良く遊べるようになるというのが仮にあるとしてです。では、1年生ではどうだろうか。2年生ではどうだろうか考えるわけです。そういう形のカリキュラムというのはいろんな附属で出てきていると思うのです。それは要するに幼稚園ってのは比較的小子どもをまとまりとしてとらえる。あるいは、子どもの自己の育ちを中心に考えると思うのですけれども、そうするとそれを上にどんどんどんどん伸ばしていくとどういう形をとるべきか。これは、基本的に幼稚園から小学校に移行する子どもの発達の様子を示すということに

なると思うのです。

もうひとつのやりかたは、小学校の教科を下に降ろしていく。教科に相当するものが幼児期にはどうなっているかということです。例えば、先ほど話したように算数というのは下に降ろしてみると数にかかわる遊びや活動があるわけです。それから、国語には言葉に関わることがいっぱいあるとか、理科なら自然に関わること動物に関わることがある。それから、道徳だったら、これは2、3年前に文部科学省で道徳性の資料を作りましたけれども、あそこでは道徳性の芽生えを培うというお話があります。つまり、そういった教科ではないのだけれど、芽生えとして、数だの言葉だの自然だの人間関係だの、社会とか、道徳性とか。ほかにもありうるわけです。それは小学校の教科みたいに体系的でもないけれども、そういったものが育ってきている。するとそういう幼児期における芽生えと教科をつないでみたらどうだろうかということです。そうやって整備していくのです。それは幼児教育を見直していく視点でもあるし、逆に芽生えを伸ばすという意味で小学校の教育を小学校の教科教育を低学年の教育方法を考え直す

ことができるかも知れない。そういう具合にして、その自己の育ちを中心とした下から上への流れというものと、芽生えから教科という上から下という、芽生えから考えれば下から上ですが、というつながりの両面を、幼稚園から小学校へのカリキュラムのながれとして組み立てていくことはできるのではないかと思います。そういう組み立て方を先ほど言ったいくつかの全国の附属で、今やっていると思います。そのあたりで、段々幼小のカリキュラムレベルのつながりというのが今見えてきたので、それをさらに先ほど言った幼児期の3年間、小学校の6年間ということで区切り目を入れなおすことで幼小連携のカリキュラムレベルのことが考えられるかと思うわけです。

付記

本特集論文は平成15年2月1日に開催された、広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設と附属教育実践総合センターとの共催による講演会（演題「幼小連携について考えておくべきこと」）の公演内容を編集委員会の責任においてまとめたものである。